

日本発達心理学会第32回大会
 2021年3月31日(Web開催)
 丸山慎^{※1}・荻野美佐子^{※2}・吉村麻美^{※3}・
 澤水真央 (^{※1}駒沢女子大学・^{※2}上智大
 学・^{※3}玉川大学大学院)

乳児はどのように楽器と出会うのか？ 「音の出るモノ」のアフォーダンスをめぐる知覚と行為の変化

【目的】

近年、音楽体験が子どもの認知的・社会的発達に及ぼす肯定的な影響について高い関心が向けられている。しかしこれらの動向は、音楽の「効果」の検証に終始しがちであり、子どもがどのような契機を経て音や音楽と関わっているのか、すなわち子どもの音体験の実際の様子やその意味を明らかにしたものとはいえない。また最近では、音楽教育の領域においてさえも、子どもが自発的に行う音遊びよりも、「形式ばった教育的な状況」での大人主導の活動に多くの関心が向けられてしまっているという指摘もある。そこで本研究では、楽器を用いた親子遊び場面の観察をもとに、楽器の側に潜在する資源(=アフォーダンス)との出会いという観点から、乳幼児期の子どもの楽器体験の過程を記述し、子どもがどのようにして楽器、そして音と出会い、行動を変化させていくのかを検討した。

【方法】

◆分析事例の概要:

「子どもの音楽的行動の発達に関するデータベース(ヤマハ音楽振興会所蔵)」(丸山・荻野・森内・澤水, 2020)に収録された1組の親子(男児)の動画データ(本データベースには30組の親子による楽器を用いた遊び場面の縦断的な観察データを収録している)。対象事例の調査期間は3.9年であり、今回は調査開始から約1年間を対象とした。この期間における対象児の月齢は2.1ヶ月から13.4ヶ月であった。観察は毎月1回のペースで行われ、調査員が調査協力者宅を訪問する「訪問調査」と調査協力者に記録を依頼する「お任せ調査」を交互に実施した。遊び場面では、「たまご型マラカス／人形(スクウィーカー)2体／コンパクト・グロッケン(鍵盤本体)とバチ／歌の絵本」を使用アイテムとし(図1)、親子で自由に遊ぶように指示した。調査時間は約10分／回であった。



図1 調査で使用したアイテム

◆分析の方法:

「歌の絵本」を除く3つのアイテムに対する親子の行動の特徴を分析した。その際、各アイテムに対する扱い方を「**一般的な方法**(例:鍵盤をバチで叩く)」とそれ以外の「**探索的な方法**(例:鍵盤をマラカスで叩く等)」に分け、さらに各アイテムから“楽器”としての音を発生させていたか、あるいは一般的な玩具やモノと同様の扱い方であったか等の点から行動を分類した。

【結果】

分類されたすべての行動に対する各カテゴリの生起頻度の割合を行為者別(「親」・「子」・「親子共同」)に整理すると、「子」の行動は探索が主であり、生後約1年間は「親」の行動(一般的な行動)を模倣するケースの方がむしろ少ないことが示唆された(図2)。

さらに、各カテゴリの生起頻度の時系列的な変化をアイテム・行為者別に記録した結果、親は調査開始時から「一般的な方

法」による行動を数多く生起させ、子どもに「見本」を示すような関わりをしていたことが示唆された。一方、子どもについては、調査開始から数ヶ月間は親と一緒にアイテムを扱うことがわずかにあったものの、単独で明瞭な行動を示すことはなかった。4-5か月齢ごろ(3-4回目の調査以降)になって各アイテムに対する「探索的な方法」による関わりが少しずつ生起しはじめた。子ども自身による「一般的な方法」による行動が記録された時期は、アイテムごとに異なっていたが、どのアイテムに対しても「探索的な方法」が先行し、それらがかなりの頻度で観察されるようになった後に「一般的な方法」の生起頻度が増加していった(探索的な方法は頻度こそ低下したがその後も持続していた)。子どもの側にこのような変化が現れはじめると、親の側にも「探索的な方法」が増加する傾向がみられた。

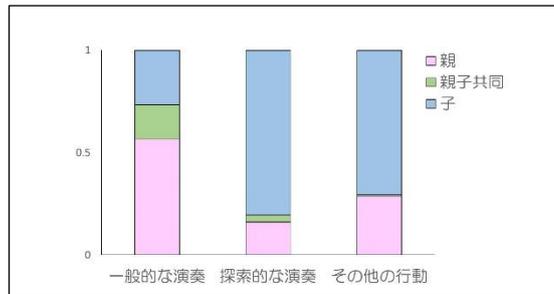


図2 行動の総生起数に対する各カテゴリの生起割合

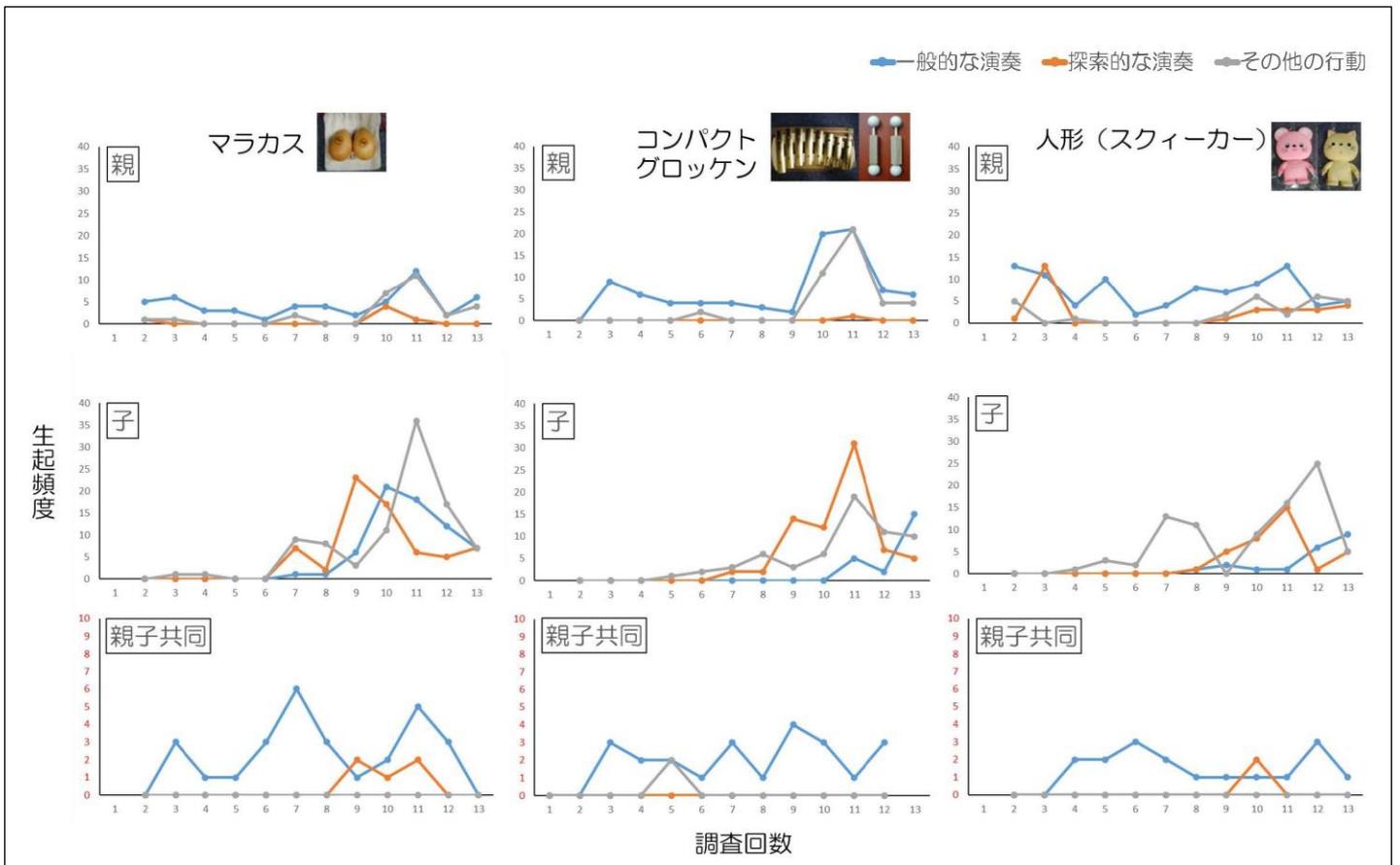


図3 行動の総生起数に対する各カテゴリの割合

【考察】

本分析の結果、子どもは親の見本行動に追従するような仕方ではなく、自身の身体的な発達に合うようにしてさまざまな探索を活性化させ(図4)、漸進的に各アイテムに潜在する多様なアフォーダンスを学習していったことが示唆された。また子どもは、各アイテムから「楽器としての音」を自身で発生させることができるようになると、「一般的な方法」の頻度を増加させていった。このような変化は、他の乳児のデータでも観察されたものである(丸山, 2017)。以上から、子どもは楽器のアフォーダンスの知覚と実現を通して、音の出るモノに埋め込まれた楽器という文化的な道具としての価値に触れる体験をし、その体験が子どもと楽器との関わりをより一層強める契機になっていたと考えられる。



図4 子どもの探索的な行動の例

【文献】

丸山慎(2017)楽器への旅路,あるいは音への誘い : 乳幼児期の音楽的発達とアフォーダンスの学習 音楽教育実践ジャーナル, 15, 114-124.

丸山慎・荻野美佐子・森内秀夫・澤水真央(2020)「楽器を用いた親子遊びの動画データベース」構築の試み—概要および研究利用への展望— 認知科学, 27, 595-606.